

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 86 号

2021 年 3 月

2021 年度の学会活動に向けて：コロナ禍でオンライン講演会の加速

会長 森本和滋

はじめに

COVID-19のアウトブレイクから1年が経過した。1月20日、榊原統子総務委員がZoom有料契約を英文で締結して頂き、Invoiceも届いた。その結果、制限時間40分の縛りから解放された。2月4日の常任理事会は、2021年度の学会活動に向けての議論をしっかりとすることが出来、2時間15分で終了した。私もこの数カ月、多彩なオンラインセミナーやシンポジウム、認定薬剤師研修会等を経験した。2021年度の学会活動に向けてのヒントを頂いた事例を、4例に絞って紹介させていただきます。

オンライン講演会の経験を通して感じたこと

8月29日：『「ウイルスってワルモノ？」ヒトもウイルスも共に自然界の一員』に参加した。演者は、5年前六史学会で出逢ったウイルス学者・加藤茂孝先生。国立感染症研究所室長を経て、米国CDCに客員研究員として2006年9月迄3年間滞在された。その時知り合ったアトランタの友人と、連続5回の無料セミナーを企画され、私も招かれた。とても判りやすいお話で、質問も自由に出来た。東京オリンピックフィールドキャストのofferを受けている私からの質問にも丁寧に答えて下さった。

「人類と感染症の歴史—未知なる—恐怖を超えて— (2013年)」、「続・人類と感染症の歴史—新たな恐怖に備える」(2018年丸善出版)を単独執筆されている。

ふと、「来春の公開講演会の演者にどうか?」とい

う思いが浮かんだ。

9月26日：米国AIHP'S History of Pharmacy Festival! のオンラインフェスティバルが24～29日開催された。第44回国際薬史学会(44th ICHP)の参加者に招待メールが届いたので、関係者に情報提供した。私が印象に残ったセッションは、Panel 9の「ブレイクスルーと倫理(Breakthrough and Ethics)」の演題、バンクーバー大学のC.K.Warshの「Dr.Frnces Kelsey and the Animals : A Case Study of the Evolution of Pharmacology in the 20th Century」の講演。米国の赤ちゃんをサリドマイドの危機から救ったケルシー博士がシカゴ大学大学院生時代の動物実験とChicago Herald-Americaの動物愛護団体のコメント事件その後の歴史を興味深く聞いた。「私もKelseyの生涯を研究し、JSHP Journalにpublishしたこと」をchat英文に書いたところ、パネルチェア・Jacalyn Duffinが「日本のMorimotoがKelseyの研究をしている」と対応してくれ、Cheryは「Kelseyは、何度か日本に来たようです」と暖かく答えてくれた。

世界がオンラインで繋がる有難さを実感した。

12月19日：日本医史学会学術大会の公開講演会は、柳田邦男先生が「心に生きる日野原重明先生～30年余の豊かな学び、そして未来へ」のタイトルで、弦間昭彦・日本医科大学学長の司会で、1時間半講演された。誰でもHPで28日(月)まで自由にアクセス出来た。私は何度も繰り返し拝聴し、しっかりノートも取らせて頂いた。学会の仲間にも紹介した。

オンデマンドの公開は、このようなメリットがあることを実感した。公開講演会も、一定期間自由にURLにアクセス出来る形式は、有難いかと思った。

1月18日：日本学術会議・日本薬学会主催シンポジウム『創薬を加速させる革新的な細胞・臓器・個体モデル』が、午後1時～5時まで開催された。

日本薬学会・高倉喜信会頭は、当初は長井記念ホールを予定していたが、緊急事態宣言の中で急遽「完全オンライン」形式に変更となったこと、関係各位の並々ならぬご尽力で開催が可能となった経緯を紹介された。

300名を超える参加者となった。講演者は、京都、東京、千葉とそれぞれの教授室からの発表となり、

聴講者が、Q&Aで質問も出来た。座長が見過ごしている場合もあり、よほど慣れをしないと質疑応答は難しいと思った。

おわりに

COVID-19の感染拡大が世界的に進む中で、Zoom形式は、とても有用なツールとなって来たことを実感した。日本薬史学会の会員は216名と小回りの利く学会である。この利点を活かして、是非4月の公開講演会は、参加者最大100名をホスト可能なZoom形式での開催が「若い世代の総務委員の方々の助けを頂いて、実現できたら」と願っているところであります。

2021 年会開催のお知らせ

年会長 松崎桂一（日本大学薬学部）

日本薬史学会2021年会をお世話することになっております日本大学薬学部の松崎です。

丁度この原稿を描いている最中、新型コロナウイルス感染症による2度目の非常事態宣言が発せられ、4月以降の見通しが全く立たない状態となりました。この様な状況下ですが、現段階では下記の通り予定しておりますのでお知らせいたします。

日本薬史学会2021年会

日時：令和3年10月23日（土曜日）

場所：日本大学薬学部校舎

（千葉県船橋市習志野台7-7-1）

東葉高速鉄道（東京メトロ東西線と相互乗り入れ）船橋日大前駅下車 徒歩7分
東京メトロ東西線大手町駅（東京駅から徒歩3分）から約37分

特別講演：（2題、うち1題は一般公開を予定）

一般講演：（口頭、ポスター）

意見交換会

薬史ツアー

日時：令和3年10月24日（日曜日）

伊能忠敬の半生を訪ねて

隠居されてから大日本地図の作成に日本中を廻られた伊能忠敬を小江戸佐原にある伊能忠敬記念館の見学と街中散策。

しかしながら現在のところ、本学は関係者以外の入校は認めておりません。また新年度の講義もオンラインを予定しています。この状況が続くようであれば、会場の変更あるいはオンラインでの開催などその時の状況により対応し、会員の皆さまの貴重な研究成果を発表する機会を守るべく、開催に向けて準備させていただきます。どうかご協力の程お願い申し上げます。

皆さまと元気にお会いし、活発な討論・意見交換ができることを願っております。

COVID-19禍中に思う

企画委員長 御影雅幸 (東京農業大学)

パリにあるフランス国立自然史博物館の方と親しくなって教えられたことがある。博物館で蒐集するものは古いものに限らないということである。

その方が来日し、請われて奈良の某神社に案内したとき、本来の目的とは別に御地蔵さんの前掛けを買い、御百度参りの“こより”も手にしていた。外国人にはさぞ珍しいものに違いないとその時は思っていたが、それらが博物館に納められるものであったことを後で知った。

最近、葛飾北斎の錦絵のオリジナル版木が見つかって話題になった。北斎の版木は海外には保存されているが、日本には殆ど残っていないそうである。刷られた浮世絵そのものも包装紙にされるほど市中に安価に出回っていたようだが、今は稀有で高価な美術品である。火鉢になった版木は幸運で、多くは薪にされてしまったものであろうか。当時は広く安価に流通していたものも、時代が過ぎれば生活習慣が変わり価値観も変わって、この世から忘れ去られてしまう。そうしたものを今の時代に見極め、蒐集し

て保存しておくことも博物館の使命であることを教えられたのである。現在、筆者はくすりの富山に住んでいるが、思えば配置薬と一緒に届けられた食い合わせの一覧表も、今では過去のものとなり、平成生まれの学生たちは知らないに違いない。今政府が押し進めようとしているデジタル化が進むことで消えてしまうものがさらに増える気がする。いつしか、地蔵の前掛けや御百度のこよりもパリの博物館に行かないと見られない時代が来るのかも知れない。

これは薬史学にも当てはまるのではないだろうか。今も時々パリから電話を頂戴する。当節の話題は専ら COVID-19 に関することが多いが、COVID-19 もスペインカゼと同様、いずれは歴史に残る重大事になることは間違いない。この原稿を認めている昨今は、ワクチン開発のニュースで持ち切りである。各国のメーカーが開発に凌ぎを削っている。COVID-19 の治療に関する現状を、いずれ検証すべき時が来たためのために如何に記録に残しておくか、これも本会が果たすべき役割ではないかと思う。

NHKカルチャーラジオ(科学と人間)：「毒と薬の歴史をひもとく」を担当して

柴田フォーラム委員長 船山信次 (日本薬科大学)

2017年の暮れのこと、NHK文化センターから、毛筆の宛名書きによる一通の封書を受け取りました。それは、同センターで開催されている「大人の教養講座」における「世界史再発見」で6回の講座担当のため登壇していただきたいとお話しでした。光栄に思っ承諾し、「毒と薬と人類の歩み」という一連のお話しをすることになりました。その際の講座の説明は以下の通りです。

《人類は古くから毒や薬を使ってきており、もしかしたら、毒や薬の使用は人類の特徴付けのひとつかもしれません。私たちはともすれば毒と薬を分けがちですが、毒と思われたものも工夫すれば人類の

役に立ち、薬と思われたものも使い方を誤れば毒と化します。そして、いわゆる毒も薬もうまく応用してきたのが人類の知恵だと思います。相反するようで実は表裏一体(薬毒同源)である毒と薬を人類の歩みを通してお話ししたいと思います。》

この内容に沿って、お話しを、「はじめにと古代・中世・近世・近代・現代・毒と薬と人類とおわりに」の6回に分け、2018年11月～12月にわたり、東京都港区南青山のNHK文化センター青山教室に通って講座担当をさせていただきました。

おかげさまでこの講座が好評だったのか、その後、この話をNHK第2放送の「カルチャーラジオ」にて

連続13回の講座として放送することになり、再度、2018年の年末～2019年1月末まで5回、同センターに通い、今度はラジオ放送のための収録にかかりました。その際、話を「毒と薬の歴史をひもとく」と改題しました。毎回の収録は2時間ほどですが、その内容が編集され、「はじめに」を初回とし、古代・中世・近世・近代をそれぞれ2回に、現代を3回、そして最後に「おわりに」とし、各回30分ずつ合計13回の講座となりました。この講座は2019年1月4日(金)～3月29日(金)にかけて、NHK第2放送の毎週午後8時半～9時(翌週の金曜日午後10時～10時半に再放送)に放送されました。思いがけない方が聴取の上、連絡してくれるなど、反響も楽しかったです。

なお、この収録と編集を主として担当して下さった方が、奇しくも、仙台一高出身である小生のライバル校仙台二高出身ということが判明し、収録後、高校時代などの話がはずみました。さらには、話の中で、彼の高校時代の同級生が小生の東北大学薬学部奉職中の教え子の一人であることもわかり、後日、ほぼ20年ぶりに当人と連絡が取れ、楽しく

お酒を飲み交わす機会も得ることができました。縁とは実に面白いものと思った次第です。

さて、こうして2019年3月までのラジオ放送が無事に終わりましたが、翌年、新型コロナウイルス禍のため、2020年4月7日には東京など七都府県に緊急事態宣言が発出されます。そのため、新規のカルチャーラジオの放送収録の一部も中止となったようです。その結果、小生のこのラジオ放送が採択され、再放送されることとなり、2020年の4月10日(金)～7月3日(金)にわたって前回と同じ要領で「毒と薬の歴史をひもとく」が放送されました。本会の森本会長もこの再放送を御聴取くださいまして高評価していただきましたことはとても嬉しく存じます。

このごろの放送による知識の伝達は、ラジオよりも視覚に訴えるTV放送が主のようになっていますが、言葉や声だけで勝負するラジオ放送は、伝達者にとって、物事を伝えるときに、よりわかっていたような言葉の選択や声の調子の工夫などが迫られることから、伝達手段としてなかなかすぐれたところもあると再認識させられた経験でした。

『薬学史入門』(仮)の出版に向けて

作成実行委員長 小清水敏昌

昨年9月発行の本レターNo.85(p.6)に概略を報告させて頂きましたが、それ以降の進捗状況をご報告いたします。現在すべての執筆者(26名)から原稿が提出されており、発行元の薬事日報社において編集上の細かな作業を行っています。終了した時点で「編集会議」を開き各委員に査読して戴く予定です。初めての薬学史の教科書となりますので、付録

も含め精査のため何回かの慎重な作業を経て出版する予定です。現時点では、コロナ禍などの影響もあり全体的に進行がやや遅れておりますが、本年5月連休後には出版することを目標に頑張りたいと思います。発刊後は各薬科大学の関係教科でのご採用はもとより図書館などに所蔵してご活用戴きますようよろしくお願い申し上げます。

訃報

本学会評議員・広報委員の木村友香先生(早稲田大学教育学部助手)が2020年12月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

薬史学雑誌55(2):128-135(2020)に原著「女子薬学専門学校の設立目的に関する研究—東京府下に着目して—」が掲載されております。

竹中祐典先生を偲ぶ書籍、研究報告書などのご紹介

会長 森本和滋

故竹中祐典日本薬史学会元理事は、2018年12月31日逝去され、翌年1月4日南池袋斎場で告別式が執り行われ、学会仲間数名とお別れをした。

副会長就任直後の2018年4月20日、竹中先生から励ましのお手紙を頂いた。「ゲールツ(Geerts)のことは、『国立衛生試験所(NIHS)百年史』でご存知と思います。彼が長与専齋に命じられて『日本薬局方』初版草稿(オランダ語)4冊を完成させた(明治10年12月脱稿)ものの内容不備として日の目を見ることもなく衛試図書館の……。化学物質情報部長としてNIHSの最重要保管物に指定されたこの草稿を……。』の思いが記されていた。自著「花の沫(あわ)」¹⁾のゲールツの箇所のコピーも同封されていた。森本は、竹中部長退任直後の1989年第一室長に赴任した。

不思議な縁で、2020年7月下旬に榮子夫人から本書が届いた。ISHP News Letter 2020のDr.Takenaka 追悼文を4月にご覧頂き、6月に本学会入会、1カ月後の嬉しいプレゼントでした(写真)。

サヴァチエ(Paul Amedes Ludovic Savatier)は、1830年10月19日フランス第二の大きな島オレロン島で誕生、モンリユー神学校、ボンス聖職者学校に進んだが、思い立つ何かがあって1849年ロシュフォール海軍医学校に席を置くことになった。1866年7月13日、サヴァチエは、身重の妻リシューを伴って横須賀に着き、医師として製鉄所に働くフランス人の医療のみでなく、欧州製の機械の扱いに不慣れた日本人従業員に多発する重症事故の手当てに忙殺された。その一方で、順化園を作って日本に未知の450種の苗木を植え、また、日本の植物研究を通して多数の日本自生植物の標本をパリの自然植物館に送るとともに、その研究の成果を「日本植物目録」(1874年、1879年)に纏めた。本書の刊行を外国語の著作に早々と紹介したのは、ゲールツであった。伊藤圭介の「日本植物図説」の存在をサヴァチ

エの「序文」を通して気づき、以後伊藤との交流を深めることになる。竹中先生(以下敬称略)から頂いた上述のコピーは、本書の218～225ページであった。サヴァチエは、10年間の横須賀でのミッションを終えて1876年1月29日離日した。そして、1891年8月27日、享年61歳で生涯を閉じた。

竹中の「あとがき」には、フランスでの勉強は、師友に恵まれて心温まるものだった。或る日、勤め先のNIHS付属図書館で何気なく手にした田中芳男・小野職愨増刊「新訂草本図説前編」(1875年)を開くと、田中芳男の手になるフランス語序文が目にとまった。そこには横須賀在留の佛人医師サヴァチエによる植物ラテン名の校訂を得たと記されている。「仏人サヴァチエとは?」、「明治の初め頃どういう目的で日本へ?」。竹中は、仕事の合間に幾つかの関連資料を国内で集め、やがてフランスにまで足を延ばすことになる。元国立科学研究所(CNRS)研究員ジョルジュ・メテリエ氏、オレロン島の二人のひ孫、ニース、カンヌ、パリに住むひ孫にも自宅に招かれ、それぞれが分け持った曾祖父の所蔵品に目を通して見ている。

竹中は、Universite de Parisで1971年3月19日学位を取得し、3月末横浜港に帰国した。その後40年余をかけて本書を纏め上げたことになる。まさにライフワークとなった。フランスに自ら出向いて現地調査、仏文の資料の翻訳等、薬史学の研究の手法を我々後輩に遺されたのだと思います。

2008年竹中は、「横須賀製鉄所の創設—その建設にかかわった在日フランス人たち」の研究報告書も出した²⁾。海軍軍医サヴァチエの孫の目を通してまとめたものを翻訳したものである(横須賀市自然・



人文博物館に電話すると500円で入手可能)。

なお、2017年10月、用賀から川崎殿町に移転した新 NIHS の1Fフロアには、アントン・ヨハネス・ゲールツ「日本薬局方草稿」序文が展示されている。

「サヴァチエ研究のためと称して一緒にフランスのあちこち旅行したことが思い出され胸がいっぱい

です」榮子夫人の言葉です。

- 1) 竹中祐典．花の沫—植物学者サヴァチエの生涯．(株)八坂書房．2013. p.1-262
- 2) 竹中祐典．横須賀製鉄所の創設—その建設にかかわった在日フランス人たち—横須賀市博物館研究報告(人文科学)，2008；53：1-69

海外の薬史学会の今 (6)香港

国際委員会 孫一善

2019年は、以下の活動を行った。

・中国本土の諸都市及び台湾における学者や臨床医間の共同研究

神農から、To Youyou (屠呦呦) まで、中国薬局の歴史に関する研究の取りまとめを集大成として合意することができた。香港薬史学会をはじめ、復旦大学薬学部、北京協和医院病院薬学部のリーダーによる本プロジェクトの主題である「5000年間の医薬品 (Materia Medica) の旅へようこそ」は、コロナウイルス病の抗体を含むハーブとヒトの血清の併用療法の内容が含まれており、古代中国から2020年までの、予防用および治療用ハーブの使用の起源と歴史の変遷を扱っている。本プロジェクトは、多言語で公表するため、中国語版の出版までに3年ほど

かかっており、2021年に出版予定である。さらに、英語版は、2022年に出版予定である。

・冷茶-19世紀の広東の農場労働者のハーブ飲料-に関するプロジェクト

2019年6月、伝統的な薬局の歴史的発展を促進することを目的に、「冷茶-19世紀の農業従事者のハーブ飲料-」に関する本を出版する案が香港特別行政政府の無形文化財局に提出された。

・第44回 ICHP への参加

現代中国における西洋薬局業務の起源に関するプレゼンテーション：北京協和医院病院薬局部門からのいくつかの事例を発表した。また懇親会で「アーサー・ローワン：日本統治時代の人道主義者」の論文を、JSHPのメンバーにも紹介した。

退職にあたりまして

学会誌刊行センター 大角玲子

「まるでここはコムスンだな！ちょうどいいリハビリ作業だよ！あっはっは・・・」

学会誌の発送作業をされていた時の末廣雅也先生のお言葉です。

いまから十数年ほど前のことです。

現役を退かれた先生方がお集まりになり、手弁当で学会業務をされていたらっしゃいました。

その学会から発行される「薬史学雑誌」の担当をさせていただきまして20年。

そして、いま、私は定年退職を迎えることとなり

ました。

薬史学会様の事務局は、以前川瀬先生がお持ちだったマンションの一室にあり、その後、学会誌刊行センターに移転した・・・と伺っております。学会事務局が学会誌刊行センター内に移転したため、投稿原稿の受付、郵便物の受取、総会や年会、入会のお問い合わせ先が弊社になりました。

先生方が月に数回、お見えになり、会誌が発行されるまでの原稿査読やゲラ確認。総会や年会の準備。会員様への会誌送付や会費請求など。多岐にわたる

学会業務はすべてが先生方の手作業。まさに「手作りの学会」。

その後、会誌発送は専門業者へ委託されましたが、そのほかの業務は今も、先生方がされております。

「薬史学雑誌」以外、ほかに数誌の会誌編集作業を行ってまいりました。が、学会を支え、発展させていく先生方のご尽力を近くで拝見させていただくこ

とで、薬史学雑誌には格別の愛着を感じております。

退職にともないましての職場身辺整理。昔の学会資料、掲載済の投稿原稿、会員様や投稿著者の先生とのメールなど。懐かしい思い出です。

会員の皆様、先生方に支えられての20年。感謝申し上げます。ありがとうございました。

今後の学会様の末永いご発展を祈念いたします。

〔Book紹介〕

Herausgegeben von Sabine Anagonostou, Usula Hiter-Trueb, Zerobin Kleist 著
「Zur Vielsprachigkeit in der Pharmaziegeschichte:
Festschrift fuer Francois Ledermann」
SGGP/SSHP (スイス薬史学会) 2020年 187ページ

スイス薬史学会は、長い間、日本薬史学会の会員になってくれている数少ない組織である。昨年末、日本薬史学会に、スイス薬史学会出版物 Band/Volume 32としてとして「Zur Vielsprachigkeit in der Pharmaziegeschichte: Festschrift fuer Francois Ledermann (薬学史における多言語主義：フランソワ レーダーマン氏に捧げる)」が送られてきた。

編集者は国際薬史学会 (ISHP) の執行部役員のザビーネ・アナゴノストウ氏、スイス薬史学会のウーズラ・ヒンター・ツリューブ氏とツエロビン・クライスト氏である。

この本は、薬史学者でスイス薬史学会の元会長のフランソワ レーダーマン元バーゼル大学教授の生誕70年を記念して、ベルンで開かれたシンポジウムにおいて発表された11の講演を纏め、編集された論文集である。レーダーマン博士は、本学会編、編集代表 奥田潤・西川隆『薬学史事典』の、「外国の薬学史」の章の総論「スイスの薬学史」を担当執筆されている。この本の表紙には、まず、この論文集のモットーとしてのラテン語の格言が掲げられている。この格言は、スイスの生薬学者 Friedrich August Flueckiger (フリードリッヒ・アウグスト・フルキガー教授)の座右の銘であったといわれている。

Scientia non unius populi sed orbis terrarum
(Wissen und Wissenschaft gehoeren nicht

einem allein,sonderm allen
Voelkern der Erde.)

(知と学問は1民族に属しているのではなく、全ての地球上の民族に属している！)

スイス薬史学会は、1947年7月6日にチューリッヒで創立された。学会は、国内外のコンgresを企画、運営している。(ちなみに、2000年には、ICHPの75周年大会は、夏に湖畔の音楽祭で有名な美しいスイス・ルツェルンで開催されている。)さらに、同じ目的を持つ海外の組織、特に、ドイツ、オーストリアの薬史学会とは、連携した活動を行っている。例えば、一緒の学会を開催したり、大学院学生の交換や薬史学の共通の教育講座を設置しており、薬史学での博士課程の単位取得のためには三か国どこの大学で単位を取得しても認められている。スイスでは、ジュネーブ大学、チューリッヒ大学、バーゼル大学に薬学史講座が設けられている。また、薬学史の研究のためには、スイス薬学歴史図書館や薬学博物館(バーゼル)が役に立つ。

問い合わせについては、スイス薬史学会のホームページ(<http://www.histpharm.ch/>、info@histpharm.ch)まで。

(国際委員 辰野美紀)



薬史往来 初代会長朝比奈泰彦先生のことなど

名誉会員 西川 隆

朝比奈先生の名前は教科書を通じて知っていましたが、業績の一部は昭和31年(1956)私が薬科大学3年の時、学長の村山義温先生の選択科目「薬化学小史」で教わりました。

若き日の村山先生は、東京帝国大学薬学科助教授・朝比奈先生の助手を務めたことがあり、大正元年(1912)留学から帰朝した朝比奈先生の授業振りをこう教えてくれました。「授業での指導振りは目の回るような速さで、私も学生も大車輪で実験を進めた。留学みやげの最新の機器や薬品を用いて、数々のアルカロイドの構造研究を発展し、研究室は道場のような感じだった。一日も早く欧州との差を縮めたいと考えていたと思う」

朝比奈先生が昭和29年(1954)創立の薬史学会初代会長と知ったのは、私が入会した昭和54年(1979)頃です。すでに先生は亡くなっておられましたが、強く印象に残っているのは、先生が残された次のような信念です。「薬学・薬業界にはその発展途上に多くの矛盾を含んでいる。それらの問題を解決するには薬学薬業の歴史を探り、批判整理しなければならない」

事実、学会創立頃の薬学・薬業に関する批判は激しいものがありました。薬学教育では昭和

24年(1959)来日の米薬剤師協会使節団が「薬剤師の業務に適する教育」を求めた勧告に関し、わが国の薬学指導者は薬剤師教育を低く見ているのではないかと、分業運動の失敗は医師と闘う戦術に原因があるとする議論が展開されていました。また、昭和26年開局の民間放送局が宣伝媒体となり、「薬の宣伝から解放されるのは睡眠中だけ」と極言される状態や国民医療費の50%を薬代が占めるという大量使用への批判も渦巻いていました。

こうした状況下、朝比奈先生や創立時からの多くの先生は、薬史学会を薬学の一分野に根付かせる活動を積極的に展開し、今年で創立66年を迎えます。今の私が考える薬史学とは、山川浩司、津谷喜一郎、川瀬清、高橋文、山田光男、奥田潤、三沢美和、河村典久の諸先生をはじめ多くの会員諸氏からの教えを咀嚼し、次のように認識しています。

＜批判的な目を忘れずに、薬学の学問的意義や薬学・薬業の社会的意義、薬学・薬業人の社会的責任などに関する国内外の歴史上の諸問題を見つめ、わが国薬学・薬業の発展に期すものでなければならない＞と。そして、この一助が名誉会員の務めと思っているこの頃です。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 荒木 二夫 小林 哲

薬史レター 第86号 2021年3月

編集人：齋藤 充生 発行人：森本 和滋

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください